1Da-6

ラジオ放送における婦人向け番組について(第２報)

○大橋きょう子
(昭和女大)

目的　情報化社会といわれる現在、私たちの生活には多種多様な情報が提供されている。中でもテレビは生活に密着した情報源としての役割が大きいが、テレビ放送開始以前は、ラジオがその役割を担っていた。特に婦人を対象とした番組は、大正１４年の開局当初から放送され、当時の婦人層に多いに活用されていた。そこで、ラジオ放送における婦人向け教養番組に着目し、番組の種類と放送内容の特徴を明らかにし、昭和初期のラジオ放送と家族および社会との関わりについて検討を行った。

方法　婦人向け番組の中から、「家庭講座」*および「婦人講座」を取り上げ、大正１５年から昭和１２年までの新聞(東京朝日)、雑誌、書籍を資料として、講演内容をすべて抜き出し、その内容を趣味・教養、育児・保育、保健・衛生、食品、栄養、調理などの１３項目に分類・整理し検索した。(*家庭講座(1925-1931)は、第５０回日本家政学会において既に発表)

結果　「家庭講座」は、趣味・教養(２６.８%)、保健・衛生(１５.３%)、「婦人講座」では、趣味・教養(４０.４%)、社会・政治・経済(２５.９%)の順で多く放送されており、講座の目的が放送内容に明確に表れていた。放送の対象が、主婦以外の婦人層にも向けられ、対象を絞った講座が次々と開設され、内容の多様化と充実が図られた。婦人層の間で視聴率が増加した一因であると考えられる。また、料理を中心とした食に関する講演の割合が少なかったのは、すでに大正１４年から料理番組が放送されていたためであると考えられる。大正から昭和初頭にかけて、女性の社会進出、大学進出、洋装化などの社会風潮が番組内容に大きく反映し、かつ定着しつつあった事が明らかとなった。